

アメリカ・インディアン・アイデンティティ と文化創造

American Indian Identity and Invention of Culture

汎インディアン運動を中心に Focusing on Pan-Indian Movement

阿部珠理
ABE Juri

1. アメリカ・インディアンとは誰なのか

アメリカ・インディアンとは誰なのかという問いへの答えは、思うほど簡単ではない。その問いに対する他者、非インディアンやアメリカ合衆国連邦政府の認識と、アメリカ・インディアン自身の自己認識は、往々にして乖離する。多くのアメリカ市民にとって、インディアンの部族および文化的多様性はさほど重要ではなく、50年代のハリウッド西部劇のインディアンは過去のものになったとしても、「インディアン」¹は彼らの多くにとって、依然として集会的な民族表象なのである。

連邦政府のインディアン政策は、その基本に「インディアン部族」の法的定義があるが、それは、合衆国とインディアンの関係の歴史的推移によって変化してきた。周知の通り合衆国の成立当時、各部族は「独立国家」と見なされており、その結果諸部族とは、条約締結という形で取り決めがなされた。最初の条約は、1778年デラウェア・インディアンとの間に結ばれたものだが、1871年の条約締結廃止までの93年間に、371もの条約が結ばれた。合衆国法によれば、条約締結には上院の2/3の賛成と大統領の署名がいる。インディアンとの条約も、諸外国との条約同様のデュー・プロセスで可決されたのだ。条約は概ね以下の点を含んでいた。

- 1) 保留地と引き替えに土地を譲る。
- 2) 合衆国の「保護」の下、自治権を有する。
- 3) 保留地での水利、狩猟、漁猟、採集権を有し、時として保留地以外の土地でも狩りができる。
- 4) 保留地の非インディアン、インディアンと取引する非インディアン、双方の紛争は合衆国法の管理下にある。
- 5) 合衆国は食料、保険、教育を必要に応じて提供する。

独立国家待遇の条約という形式をとりながらも、これらの内容が指し示すのは、自治や司法権は限定的なものにとどまり、食料や教育といった生活条件を合衆国に依存する半独立国家状態であり、実質的には合衆国の管理下におかれた民族集団の姿である。1871年の条約停止以後は、各部族は法解釈上も独立国家とは見なされず、大統領とインディアンの間で「合意」がなされるようになった。「合意」はおおむね上記の条約内容を含むが、生活基盤の喪失から弱体化の一途をたどる諸部族と合衆国の力学があらわになっていく。1871年の時点では、先住民は48州中10州、ミシシッピ川とロッキー山脈の間の1/4の土地を有していたが、ドーズ法²と諸「合意」をへて、1900年の初頭には、8000万エーカーを失い、ほとんどの土地は合衆国の所有に帰した³。

このように急速に生活基盤を失ったアメリカ・インディアンの貧困化は進み、彼らはますますその生活を合衆国に依存するようになっていった。連邦政府が条約義務によって保護援助するにあたって重要になるのは、その対象の特定である。つまり、誰がインディアンであるかを法的にも定義しなければならない。19世紀末から強力に押し進められた同化政策や、1950年代の連邦管理終結政策による都市部へのリロケーションをへて、離散と混血化の甚だしい彼らに対し、インディアンであることの基準を設けなければならなかった。1824年陸軍省に創設されたインディアン局(Bureau of Indian Affairs: BIA)⁴は、1849年内務省に移管されて現在にいたるインディアン対策の主幹部局であるが、その定義によれば「インディアン」とは、連邦政府公認部族のメンバーであり、さらに1/4の純潔値

(blood quantum) を有するものということになる。

だがアメリカ・インディアンに向けられた種々の法律は、それぞれ受益資格を異にしている。例えばインディアン教育法(1972)の対象は、保留地および都市インディアンともに1/8の純潔度をもとめており、インディアン・ヘルス・ケア改善法(1976)は公認部族メンバー⁵であればよい。さらに彼らの伝統工芸のпатентやコピーライトを保護するインディアン美術工芸品法(1990)は、公認非公認にかかわらず部族メンバーであることのみを条件としている。このようにインディアンであることの構成要件は一律ではなく、厳密にインディアンを定義する立法、司法上の基準は明らかではないのである。

それではアメリカ・インディアン自身の自己認識はどうであろうか。彼らは、伝統的に帰属する部族と自己同一化してきた。インディアンである以前に彼らにとって重要なのは、部族民としてのアイデンティティなのである。部族という名辞自体、西欧人入植者の分類範疇であり、アメリカ・インディアン諸語には元来なかったものだ。現在でもスーヤシャイアンといった部族名称のあとにトライブではなく、ネーションが好んで使われるのも、自部族中心の彼らの世界観をよく表している。また、アメリカ合衆国の50の州名の半数はインディアン語に由来しているが、部族名も単に「人」を意味するものが多い。たとえば、カイオワ、イリノイ、レニレナベ(デラウェア)、アニウィンウィヤ(チェロキー)が、単に「人間」、「本当の人」を意味していることも、下位概念としての部族ではなく、独立した民族集団としての矜持の表れと見ることが出来よう。

実際彼らがインディアンと呼ばれる時感じる違和感は、日本人、中国人、インド人がその違いを度外視され、アジア人と一括りに扱われるとき経験する不適合感に通じるものだ。このような「民族」意識の根底には、歴史過程に明瞭な部族間の大きな差異がある。当然のことながら、広大な北アメリカ大陸の変化に富む自然条件に適応した諸部族は、異なる生業、生活形態、信仰対象を持ち、それらに見合う異なる民族創世神話を持っていた。農耕、狩猟、採集、およびそれらが混淆した生業形態、生産活動は、地域の風土、天然資源、天候に見合って発達したし、住居や衣服も地域、部族

によって独自の様式を持った。同じ定住農耕民でも北東部に住むイロコイ族と南西部のホピ族は、かたや木の皮をはったロングハウス、かたやアドベレンガを積み上げたブエプロ、移動民のスー族は丸テントのティーピーと差異は甚だしかった。女性の衣服などは、同じ狩猟移動生活の平原インディアンの中でも、バッファローという共通の素材を使いながら裁断の型、施される意匠が異なり、それによって部族を特定することができた。意匠にはそれぞれの部族の祖先や創世神話が形象化されたものが多く見られる。

言語にしても、アメリカ・インディアン諸語に分類される言語が200にのぼり、それらを近縁性によって分類したサピアの6大語族⁶は、相互の通話性はまったくないほど異なる言語圏である。同一言語圏内、たとえばホケン・スー語族内でも、ラコタ語の話者とマンダン語の話者はほとんど理解し合えない。このような言語障壁を越えるためアメリカ・インディアンはサイン・ランゲージを発達させ、後のアメリカン・サイン・ランゲージに範型を提供した⁷。

さらに部族間抗争が部族内の結束を固め、部族への忠誠心の涵養に働いてきた。諸部族間には、スーとクロー、ナヴァホとホピ、イロコイとモヒカンなど伝統的天敵が存在する。かつては獵場の獲得戦から不仲なスーとクローは、19世紀中葉以降の合衆国の平原インディアン討伐に際して、反米と親米とに旗幟を違えたことから反目し、敵対意識を深めたまま現代に至っている。

だが、アメリカ・インディアンの帰属意識が部族にあるのは、以上のような歴史伝統的経緯によるばかりではない。先にも述べたよう、連邦政府の補助の対象は、公認部族が基本となっている。ことに住居、医療や教育といった生活に直結する連邦政府のサービスの受給者となるには、公認部族の保留地に居住していることが望ましい。BIAのインディアン・ヘルス・サービスが運営する保留地内病院で受ける治療は無償であるし、HUD (House and Urban Development) のプロジェクトは、保留地内の住宅供給の予算を持つ。部族大学で教育を受けるものは、学費も免除される。部族民資格がもたらすこのような経済的利点も、部族への帰属意識強化への動

機となっていることは否めないだろう。

このように物心両面から支えられた部族民意識が、保留地住民の基本的な自己認識である。だが一方で、部族を越えた汎インディアン意識が存在するのも、事実である。基層の部族民意識とそれは、言わば2層をなすアイデンティティを形成している。次節では汎インディアン運動の系譜を概略し、それら運動が涵養した汎インディアン意識、集合的なアメリカ・インディアン・アイデンティティの形成について考える。

2. 汎インディアン運動とレッド・パワー

人は他者の存在を強く意識した時、自己のアイデンティティを彫琢する。その意味で、アメリカ・インディアン諸部族に部族を越えた結束を促し、汎インディアン意識に目覚めさせたのは、白人という共通の敵であったろう。汎インディアン運動は一般に、20世紀に活発化した一連のインディアン復権運動をさすが、歴史上の諸部族連合を汎インディアン運動の前史として位置づけ、ここではその代表的なものを確認しておきたい。

17世紀中葉、白人入植者に戦いを挑んだ最初の大掛かりな連合は、現在のヴァージニア、チェサピーク湾沿岸のポーハタン連合である。歴史上名高いポカホンタスの父、ポーハタンが率い、200の村を含む32部族で形成されたこの連合は、彼の死後その弟オベチャンカヌウに統率され、英国の最初の入植成功地、ジェームズタウンの拡大を阻もうと戦いを挑んだ。この連合の敗北がその後のインディアン—白人の力関係の逆転を象徴する。

プリマスでは、植民地の窮乏を助けたワンパノアグ族首長マサソイトの死後、横暴化する入植者に対し、息子のメタカム（キング・フィリップ）が立ち上がった。彼は、ニプマック、ナラガンセット他北東部諸部族に呼び掛け、2万人にのぼる連合を成立させた。このフィリップ王戦争で特徴的なのは、インディアンが彼らと白人の生き方の差異を強調し、単なる「物質的生存」のためでなく、「イデオロギー的生存」⁸をかけて戦ったことだった。セネカ、モホーク、オネイダ、オノンダガ、カユガ、後に加わったタスカローラからなるイロコイ連合も白人の無視し得ない勢力として、独

立戦争に巻き込まれ分裂する18世紀末まで、五大湖周辺に不可侵の基盤を維持していた。

インディアン連合は軍事的、政治的性格を強く持ったが、モホーク族のジョセフ・ブランドは、北西部諸部族に連合を呼びかけるにあたって、部族の垣根を越え、諸部族の土地を共有することを提案し、「一つの心」に集うよう、彼らの精神に強く訴えた。⁹ また、歴史上もっとも英雄的な汎インディアン運動は、テクムシによって率いられたものであろう。テクムシは、部族間抗争の無意味を説き、共通の敵にむかって大同団結するよう訴えた。「兄弟たちよ、我らは一つの家族に属している。みな同様にグレート・スピリットの子供であり、同じ道を歩き、同じ泉に咽を潤す。我らを脅かすものに立ち向かうため、一つの火を囲み、パイプを吸う時がきた」¹⁰ この呼び掛けによるウィスコンシンからメキシコ湾岸にいたる大連合は、1812年のテクムシの死によって潰えたが、部族を越えて共有しうる精神の普遍的価値を核とする汎インディアン運動の特徴は、汎インディアン意識を涵養しながら、20世紀の汎インディアン運動に受け継がれていく。

17世紀から続く受難の歴史の帰結として、19世紀末には、ジェロニモに率いられたアパッチ族、チーフ・ジョセフのネズ・パース族、平原のスーヤシャイアンといった抵抗部族が相次いで制圧され、保留地に囲い込まれていった。19世紀後半から20世紀の前半は、多くの部族にとって暗黒の時代であったといえる。貧困に加えて蔓延する無気力、自尊心の喪失は、彼らから将来の希望を奪っていた。しかし、折から起きた第2次世界大戦は、一部のインディアンに社会上昇の機会を提供し、あらたなリーダーシップを擡頭させた。アメリカの戦争はことに第1次世界大戦より、貧困な白人層や周縁化されたマイノリティ・グループの戦後の地位向上を助長した側面があるが、アメリカ・インディアンの第2次大戦に際しての入隊率は、民族グループ中トップであり、兵役に就いたインディアンは2万5千人をこえた。¹¹ この軍隊経験によって、初めて外部世界を体験し、知見を広めたインディアンも多かった。

新たな権利意識に目覚めたそうしたインディアンたちが、部族を横断して結成したのがアメリカ・インディアン全国会議 (NAI) である。1944年、

地位向上と失われた権利回復を求めて、コロラド州デンバーに全米27の州から部族指導者たちが結集した。彼らは強力なロビー活動を通じて、1946年、諸部族の土地回復訴訟のための「インディアン請求委員会」の設立に成功した。¹² 1961年、NCAIがスポンサーしたシカゴ・インディアン会議は、汎インディアン運動の一つの頂点をなすものだった。¹³ 全国90部族460人の代表を集めたこの会議で画期的なのは、インディアンという「民族」固有の権利の回復を謳ったことである。採択された「目的宣言」は、汎インディアン意識に貫かれている。「われわれは、精神ならびに文化的価値を保持するのは万人の権利であると信ずる…われわれインディアンは白人がやってきてわれわれの土地を取るまで何千年にわたって、その権利を実践してきた…」¹⁴ という宣言には、政治的復権の重要性とならんで、民族の共通価値としての精神文化が位置付けられているのは注目し得る。同年結成された「全国インディアン青年会議 (NIYC)」は、「民族自決」の路線を先鋭化させ、ダム建設反対運動や漁業権闘争に、部族を越えて多数の若者たちを動員した。

このように60年代以降、公民権運動およびエスニック・リヴァイヴァルの潮流の中で、レッド・パワー¹⁵は大きなうねりとなるが、汎インディアン意識の共有の広範な広がりには、アメリカン・インディアン・ムーブメント (AIM) が決定的な影響をおよぼした。彼らは、保留地に基盤を置かない都市インディアンの集合から出発し、彼らと保留地インディアンを繋ぐ役割を果たした。出自とは切れた生活空間に生きながら、何らかの帰属感を希求する多数の都市インディアンを、AIMは確実に運動の網にすくう一方、活動を通じて部族インディアンとの連帯を深め、双方のインディアン意識の強化に貢献したのだ。

AIMは1968年デニス・バンクスやラッセル・ミーンズら¹⁶によってミネアポリスで結成された。AIMは、アルカトラズ島占拠 (1969) に関わったあと、首都ワシントンの内務省インディアン局 (BIA)、サウス・ダコタ州ウンデッド・ニー (1973) などインディアン合衆国関係史上の負の象徴¹⁷を闘争の場を選び、メディア効果も相俟って急速に賛同者を拡大した。ことにウンデッド・ニー占拠は71日に及び、FBIとの銃撃戦で二人の死者を

出したが、この行動によってAIMは条約破棄、民族的偏見、経済的搾取など彼らに対する合衆国の不正を内外に知らしめることに成功した。だが彼らにとっての最大の成果は、「民族」としての連帯と結束を実現させたことであり、インディアンとしての内なる自己を回復したことであろう。アルカトラズ島の牢獄の壁に殴り書きされた「死より赤を選ぶ」¹⁸は、まさに民族的矜持の強い発信であったのだ。

インディアンの人口動態も、汎インディアン意識の高まりと明らかに呼応している。1900年に25万人にまで落ち込み「消えゆく民」と言われたインディアン人口は、100年後の2000年には約10倍になったが、1960年代からの増加が著しい [図1]。ことに60年代の51%、70年代の79%という驚異的な増加率は、自分をインディアンと自己申告するものの飛躍的な伸長の反映と解釈される。インディアンはもはや社会の周縁に逼塞する卑小な個人ではなく、インディアン・アイデンティティを誇らしく謳う「民族」に変貌したのだ。

AIMが牽引し影響を与えた汎インディアン運動は、RenewalやRenaissanceと呼ばれた。なぜなら、インディアンの復権には、政治的課題の解決のみならず、いのちと魂の再生が不可欠であることを、彼らは発見

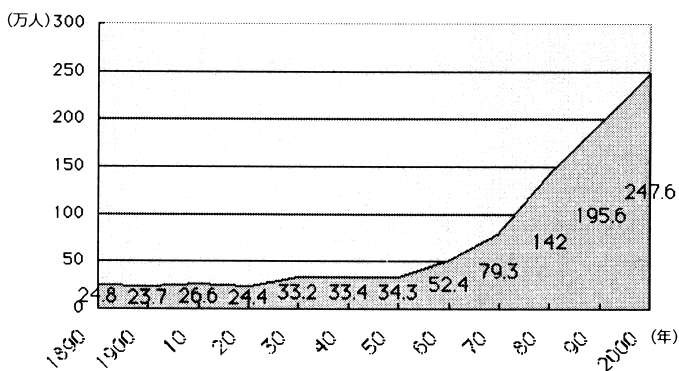


図1 インディアンの人口動態 (1890-2000)

U. S. Department of Commerce, *Census 2000 Special Reports*
Demographic Trends in the 20th Century などによる。

したからだ。事実マイノリティ・グループのエスニック・リヴァイヴァルの中で、インディアンほど「精神性」と「信仰」を自らがよって立つ価値基盤として重要視したグループはいない。それは喪失を余儀無くされ、みずからも見失った伝統を再び見つけ、そこにすべての部族に通底する普遍的価値を認識し、その普遍性を新たな時代の形の中で生き直すことに他ならなかった。

3. 精神の革命としてのウンデッド・ニー

政治闘争が「まつりごと」として、精神性の復活に結びついた格好の例がウンデッド・ニーの占拠であろう。サウス・ダコタ州パイン・リッジ・リザベーションでおきたこの事件は、もともとパイン・リッジ部族議会の議長リチャード・ウィルソンの不正と専横に端を発している。パイン・リッジは現在でも合衆国最貧地帯のひとつであるが、当時の生活環境は劣悪な上、連邦補助金が議長一派に着服されていた¹⁹。議長のリコール運動が展開され、ウィルソンと「ゲーンズ（ならず者）」と呼ばれる彼の私兵は、その動きを暴力で抑え込もうとして、部族は分裂した。AIMはリコール派部族民の要請で現地には到着し支援活動を始め、ゲーンズの暴力への対抗上、ウンデッド・ニーの交易所とカトリック教会を占拠するに至ったのだ。ウィルソンはFBIの出動を要請した。戦車があらわれ、銃弾が飛び交い、ヘリコプターが旋回した。映画のシーンさながらの現場にはメディアが大挙して押し寄せ、世界中にニュースが流れた。しかしこの成りゆきにもっとも耳目を引き付けられていたのは、他ならぬ全米のインディアンであったにちがいない。報道される「インディアン問題」に多くのインディアンが自分たちの過去と現在を重ねた。

事実、ウンデッド・ニーは、インディアン社会が直面してきたもう一つの問題を顕在化させた。それは支配的な白人社会やBIAと結託して、恩恵をこうむってきた部族支配層の腐敗である。一般に貧しい保留地で、部族議会は貴重な雇用の供給源となっている。部族議会の議員をはじめ、職員、ヘルス・サービス、部族警察、部族裁判所などに関わる有給職は、多くの

部族で「進歩派」と呼ばれる部族民に独占されてきた。部族政府の発足は、1934年のインディアン再組織法（IRA）が契機となっているが、この法を推進した当時のBIA局長ジョン・コリアが目指した「民族文化」の復興と保持の理念とは、まったく裏腹な事態を現出させた。

部族憲法の制定や部族議会設立に際して、読み書きができ、合衆国の政治システムを学習した「進歩派」が重用されたからだ。進歩派はおおむね、保留地生活が始まって以来、合衆国の同化政策に積極的に協力してきた層からなっている。同化政策を拒みかつての生活や、伝統的な精神価値、母語の保持に努めようとするものは、対照的に「伝統派」と呼ばれた。伝統派はかつての部族指導層として部族民の尊敬を集めたが、部族議会制度は、彼らをますます部族運営から遠ざけ、彼らは貧困の度を深めていった。部族に連邦予算を配分するBIAは、歴史的に汚職の温床と言われてきたが、IRA以降多くの部族議会は、BIAとの癒着を深め利権を独占するようになった。こうして多くの部族で、いびつな階層化と部族内分裂は深まったのだった。オグララ・スー部族議会を告発するウンデッド・ニーの事件は、その分裂のもっとも先鋭化した事例と位置付けることができる。

AIMはこの占拠によって、それまで部族運営から疎外されてきた伝統派の心情を掬い上げ、実際彼らを運動の前面に押し出していった。占拠の指導者の中にクロー・ドッグのような著名なメディスン・マン²⁰が含まれていたことがそのよい例である。占拠者は常時200人を数えたが、占拠者のひとりメリー・クロー・ドッグの自伝²¹によれば、夜陰に乗り包囲網をかいぐり、全米から支援に訪れたインディアンは、延べ2千人を超えたと言う。

ウンデッド・ニーはインディアンにとって、単なる政治闘争に留まらず、重大な意識革命の始まりであった。筆者自身が行ってきた当時の占拠者への聞き取り調査でもっとも印象的なのは、多くの占拠者がその時を振り返り「生まれ変わったような気がした」と告白していることである。占拠した教会の中では、銃撃戦の中にもかかわらず、頻繁に祈りの儀式が行われたという。占拠者の1人は、パイン・リッジでもっとも尊敬を集めるメディスン・マン、フルズ・クローが老体をおして現場までやってきた時の感動を忘れない。フルズ・クローはそこで儀式を執り行い、占拠者のひと

りひとりを、自ら纏っていたブランケットで包みこみ祝福した。あなた方は、自らの命を民のために捨てる高貴な精神を持つ真の勇士であると。勇士の伝統は、そこに参加していたスーヤ、チッペワ、ミック・マックの部族固有の伝統ではない。すべてのインディアンが共有するインディアンであるための精神文化であると²² フールズ・クロウの言は、まさに彼らの刷新された精神を代弁するものであった。

多数の支援者を集めたウンデッド・ニー占拠は、全米のインディアンに意識変革をもたらしたし、AIMの活動は部族主義の超克に大きな貢献をした。このころから盛んに「インディアンネス」という言葉が使われ始めたが、運動を通じて多くのインディアンが、インディアンネスに目覚めたといっている。インディアンらしくあること、インディアン・アイデンティティの自覚が、貶められていた魂を癒し、命の再生を促したのだ。

4. 汎インディアン文化の創造

「民族自決」という政治的スローガンを土台において補強したのは、既述のような精神主義運動であった。汎インディアン運動の精神主義が外部にむかって発信されていったとき、アメリカ社会においては、折からあらたな思想潮流が渦まいていた。政治的には、ニュー・レフトがアメリカにおける民主主義の真の意味を問い直していたし、文化的にはカウンター・カルチャーの波が主流文化にさまざまな問いをなげかけながら、その支配的価値の相対化を目指していた。

富と効率を飽くことなく追求してきた近代産業資本主義の負の帰結は、自然破壊や環境汚染となって表われ、エコロジー・ムーヴメントを活性化させていた。そのようなアメリカ社会と共鳴しながら、インディアン・スピリチュアリズムは、「共生」と「癒し」という中心概念を彫琢してゆく。さらにそれらはニュー・エイジ・ムーヴメントとの接合により、インディアンの精神哲学、知的財産として市民権を得てゆく。60年代以降のカウンター・カルチャーの中に胚胎したこの運動は、世界を覆う西欧近代文明の一元的価値の相対化を目指し、ことに「病んだ」物質文明の救済の術とし

て新たな精神文化を希求する運動だったといえる。これらの運動を担ったニュー・エイジャーは、戦後のアメリカの団塊世代、ブーマーたちであるが、現代人の消費型ライフスタイルが招いた環境破壊が深刻化する中、彼らは太古からの自然との共生者、大地の癒し人のイメージを先住民に重ねていく。ことに彼らの関心を引いたのは、癒しの師としてのメディスン・マンの存在である。

70年代から80年にかけて、メディスン・マンの伝記が相次いで出版され、²³ アメリカではメディスン・マンブームに火がついた。UCLA やスタンフォード大学で、メディスン・マンによる講義が行われたり、伝統の儀式であるスエット・ロッジやパウワウが広く紹介されるようになった。流行は偽メディスン・マンを生み、間違った作法の儀式で死者をだし問題になったのもこの頃である。²⁴ インディアンは汎インディアン運動を契機にした精神主義運動によって、思いがけない注目を浴びようになっていた。そこには、しかし、滅ぼしたものを懐かしむ逆説的な懐旧の情、帝国主義的ノスタルジー²⁵や、自分達が失った「始源の純粋な本源的世界」にネイティブを閉じ込めようとする西欧人のオリエンタリズムの眼差しを否定できない。

だが、インディアン自身は、他者のそのような眼差しにナイーブに反応しただけではないだろう。むしろ、白人という他者の視線を巧みに流用して、自己表象やアイデンティティの創出に役立てる、他者に属するものを自己のものにするアプロプリエーションを戦略的に行っているように見える。彼らの思想や儀式への共鳴者が外部で増えてゆくにつれ、民族としてのインディアンの紐帯は強められ、その紐帯に見合う形で汎インディアン文化が創造されてゆくのだ。

その典型的な例のひとつにパウワウが挙げられる。パウワウ Powwow は、アルゴンキン語の pauau に由来するといわれ、本来は病気治療の儀式を意味していたが、その後人の集まりを指す語として広く使われるようになった。²⁶ 現在では、一般にインディアンが主催する歌と踊りの祭典を指す。歌と踊りの伝統は、インディアン諸部族共通に根強く残る伝統文化であり、19世紀末から強力に押し進められた「同化政策」、ことに寄宿学校で強制された母語の禁止によって、インディアン諸語が話者を激減させるなか、生

き延びてきた。儀式やパウワウでの歌は、かならず太鼓をともない、歌詞と太鼓が刻むリズムの総体を「歌」と呼ぶことが多い。地響きにも似た「体感的」リズムは、身体に刻まれるゆえ容易に忘れ去られることがなかったのだろう。

歌と踊りが織りなすパウワウは、かつては、戦いや狩りの成功を祈念したり、その成果を祝う際に催された。それは祈りという「聖」なる部分と、部族民の楽しみや社交といった「俗」の部分を合わせ持つイベントだった。宗教色の極めて強いサンダンスほど、合衆国の抑圧を受けなかったのは、その世俗的性格が幸いしたせいかもしれない。

部族単位で行われていたこのパウワウは、50年代以降急速に部族の垣根を越え、規模を拡大してゆく。この部族横断的傾向の最初の明確な表れは、1955年にオクラホマで開催された部族連合パウワウとされる。²⁷ その後レッド・パワーの勃興と浸透にともない、All American Indian Days（ワイオミング）、American Indian Exposition（オクラホマ）、Mid-America All Indian Day（カンザス）など汎インディアンの色彩を強く打ちだすパウワウが続々と誕生し、同時に部族主催のパウワウには、部族外の参加者が増大した。現在モンタナのクロー・フェアや、サウス・ダコタのオグララ・フェアのパウワウには、全米から参加者が集まる。参加者ばかりではない。同時にパウワウは全米から観衆を引き寄せる。それら観衆は非インディアン、多くは白人の観光客であり、彼らはパウワウに「インディアン文化」の粋を読み取ろうとやって来るのだ。パウワウはこうした他者の視線のなかで、民族固有の文化としての表象性を強め、汎インディアン性を補強している。

さらに、部族間交通を促す大きな要因に、パウワウの世俗化、コンテスト化を考えねばならないだろう。パウワウの脱部族化にともない、部族固有の祈りの部分は希薄になり、娯楽と社交が大きな意味を持つようになった。さらにはダンスが競技化して、優秀な踊り手に賞金が与えられるようになった。²⁸ 5月から9月にかけて、全米で開催されるパウワウは数百にのぼるが、ダンサーはいくつものパウワウを「はしご」するのが通例だ。行く先々で再会を果たすことから、そこでできた仲間をさす「パウワウ・サー

キット」という語も誕生している。ダンサーが払う出場料も含め、パウワウの商業化、競技化には一方で批判があるが、汎インディアンの民族文化としてパウワウが促進する連帯の強化は、それをはるかに上回る価値が見い出されている。

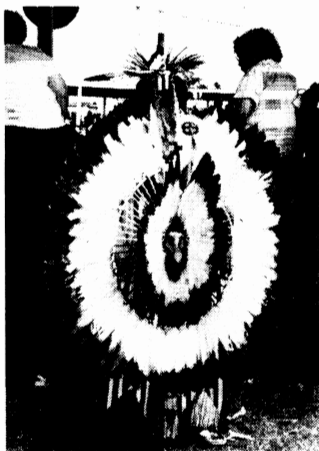


写真1
ファンシー・ダンスのバスル



写真2
サウス・ダコタ州ローズバッド保留地
パウワウ



写真3
ミネソタ州ミルラック保留地
パウワウ

パウワウを汎インディアン文化創造の視点から見る上でさらに重要なのは、あらたなダンス様式の誕生である。異なる多くの部族が持続的に接触すれば当然のことながら、相互の部族文化に影響を与える。例えば「戦いの踊り」はそれぞれの部族が共通に持っていたカテゴリーであるが、それぞれの名称やスタイルは異なっていた。ショショニやアラパホ族はウルフ・ダンス、クリー、アシニボインはグラス・ダンス、オマハ、スー族はオマハ・ダンスと呼んでいたその踊りは、オマハ族の影響をもっとも残しながらも、パウワウを通して融合が進み、今や「ファンシー・ダンス」としてスタイルの統一を見ている。それに伴い、ダンス装束も山あらしのヘッド・ドレス、ワ

シの羽根のバスル（腰当て）というスタイルが確立している [写真1]。女性のジングル・ドレスも部族の出自は特定出来ないが、いまでは広く普及している [写真2、3]。またコンテストには必ず少年、少女の部が設定され、民族文化の保持と継承が目指されている。

パウワウの目的は単にダンスを競うことではない。ダンスと歌を縦糸に人々の集いを横糸に、文化を介在に人と人のつながりを紡ぐことに、その社会的意味がある。パウワウは通常数日におよぶ。その際参加者もその家族も、見物人も、ダンス・グラウンドを取り囲んでキャンプを張る。そこではさまざまな交換と交流が行われる。日本のお盆にも似て、遠く離れた親族が一同に会する機会でもあり、未知の部族同士が知り合う場でもある。食事は通常主催者が提供する。これは feed と呼ばれるが、ここには、共食を重要なコミュニケーションと考える、多くのインディアン部族の価値が反映されている。また、ダンス終了後に、かつては平原部族の伝統であった Give Away²⁹が催されることが多い。このように、パウワウは、諸部族の伝統が融合された新たな文化創造の場になっているのである。

美術工芸品にも、汎インディアン運動の影響が認められる。ドリーム・キャッチャー [写真4] は今や、部族交易所から原宿の露天でまで売られている人気のインディアン・アイテムである。どの部族がその発祥であるのか明らかではないが、その原形と思われるものが、20世紀初頭、チッペワ族のスパイダー・ウェブとして記録されている。³⁰ 悪い夢を捕まえてくれるというそれは、現在では良い夢を捕まえてくれるインディアンのお守りとして、アメリカ社会に広く普及するようになった。ドリーム・キャッチャーは一例にすぎないが、もともと南西部インディアンがスペイン人との接触から学んだ銀細工や、北西海岸の木工品など、部族を離れて作者と受容層を

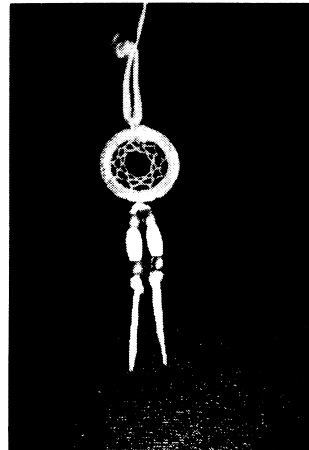


写真4
ドリーム・キャッチャー

増しているのも、伝統の広域化と汎インディアン文化への融合を思わせる事例である。

5. おわりに

汎インディアン・アイデンティティの形成を、汎インディアン運動の歴史にそって俯瞰し、ことに重要な働きをした20世紀の汎インディアン運動の精神的側面に注目して見てきた。またそこで活性化した精神主義が、あらたな汎インディアン文化の創造に大きな役割を果たしたことを確認した。だが筆者は、個別の部族文化やアイデンティティの消滅や否定を主張するものではない。汎インディアン・アイデンティティの芽生えが、民族としての誇り、人間としての尊厳の回復に肯定的に作用したのは明らかである。他方保留地においては、生活基盤としての部族文化の掘り起こし、ことに宗教儀式の復活や母語教育が進行中である。時として汎インディアン運動が触媒となって、部族文化復興運動がおきたケースもある。

現実には多数の保留地インディアンは、部族意識と汎インディアン意識の双方を生きている。コード・スイッチングという言語学の概念を援用するなら、二つの意識は背反することなく、場面により主体的に選択され、彼らは2層の意識を抵抗なく住みわけていることになる。さらに、癒しの伝統や、パウワウ、インディアン・アートが広く受容され、白人社会におけるインディアン文化認知の度合いを深めている。そうした他者の眼を流用しつつ、それらを文化資産化するポリティクスも認められる。これらの点についての考察は、別稿に譲りたい。³¹

註

1. PC運動を契機に「ネイティブ・アメリカン」の呼称が広く使われるようになってきているが、公文書および、諸部族によっても、呼称は一定していない。筆者も歴史的文脈との整合性から「インディアン」を使用している。
2. 1887年の一般土地割当法。部族共有の保留地の土地を個々の部族民に割り当て、すべてのインディアンを小土地所有農民にして部族共同体を解体に導き、インディアンを合衆国市民として同化しようとする趣旨の法案である。白人の合法的な土地奪取の突破口を開き、施行半世紀で保留地面積を1/3に激減させた。
3. スー族を1例にとれば1877年のブラック・ヒル条例、1889年スー条例、1910年までのホームステッド法により、1868年のララミー砦条約によって保留されていたグレート・スー・リザーベーションの面積は8000万エーカーから500万エーカーまで減少した。
4. 設立の目的は、インディアン向け物資、補助金の分配、支出項目の審査、承認、インディアン文明化のための基金の管理、インディアン、白人間のもめ事の裁定などであった。House Document no. 146, 19-1, serial 138, p. 6.
5. Federally Recognized Tribes. BIA 予算配分の対象となる先住民部族。現在554部族。
6. ネダネ大語族、エスキモー・アレウト大語族、アルゴンキン・ウォッキヤッシュ大語族、アズテック・タノア大語族、ペヌート大語族、ホケン・スー大語族
7. Garrick Mallery, "Sign Language among North American Indians, Compared with That among Other Peoples and Deaf-Mutes," *Annual Report v. 1*, Washington, D. C.: Smithsonian Institution. Bureau of American Ethnology, 1881.に詳しい。
8. Vine Deloria Jr., *Of Utmost Good Faith*. New York: Bantam Books, 1972.
9. Hazel W. Hertzberg, *The Search for an American Indian identity: Modern Pan-Indian Movements*. New York: Syracuse University Press, 1981, p. 7.
10. Carl F. Klinck, ed., *Tecumseh*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1961, p. 105.
11. Tom Holm, "Fighting a White Man's War: Extent and Legacy of American Indian Participation in World War II," in Peter Iverson ed., *The Plains Indians of the Twentieth Century*. Norman and London: University of Oklahoma Press, 1985, pp. 152-153. ホルムは信頼できる統計実数の不在を指摘した上で、2万5千を上回る数を示唆している。当時のインディアン人口、約34万人からすると、極めて高い入隊率である。
12. 1970年合衆国は48,000エーカーの土地をニュー・メキシコのタオス・プエブロ返還することを決めたことなど、その成果である。
13. 富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣、1997年、3-19頁。
14. Alvin M. Josephy, Jr., *Red Power: The American Indians' Fight for Freedom*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1985, p. 37.
15. デイは、この語が1966年のNCAIの会議においてヴァイン・デロリア・ジュニアによって最初

に公式に使われたと指摘している。Robert C. Day “The Emergence of Activism as a Social Movement,” in H. M. Bahr and Day ed., *Native American Today: Sociological Perspectives*. New York: Harper and Row, 1967, p. 507.

16. デニス・バンクスは現在も AIM の中心的活動家としてレナード・ベルティエ解放運動に関わり、ラッセル・ミーンズは俳優に転身して、民族自決に関して活発な発言を続けている。

17. BIA は全国行進「破られた条約の旅」の到着点であり、ウンデッド・ニーは、1890 年第 7 騎兵隊による非武装のスー族が虐殺された場所である。

18. Better red than dead はマカーシズムの標語 Better dead than red をもじったものである。

19. *Oneway*, no. 30, Spring 1983, p. 22.

20. かつて伝統的社会において、精神的指導者として尊敬を集めた。創造主と繋がるものとして、肉体・精神の病を治癒し、さらにヴィジョンによって人々を導いた。

21. Mary Crow Dog, *Lakota Woman*. New York: Harper Perennial, 1991, p. 143.

22. 筆者のインタビューに応えた占拠経験者、デニス・バジクス、レナード・クロー・ドッグ、メリー・クロー・ドッグ、ラッセル・イーグル・ベア、オーレン・ホース・ルッキング他の証言により構成した。

23. John G. Neihardt, *Blak Elk Speaks*. University of Nebraska Press, 1972. 再版（邦訳「ブラック・エルクは語る」阿部珠理監訳、めるくまーる、2001）John (Fire) Lame Deer and Richard Erdoes, *Lame Deer: Seeker of Visions*. Washington Square Press, 1972. Doug Boyd, *Rollong Thunder*. Dell Publishing, 1974.

24. “Woman's sweatlodge death symbolizes spirutal debate,” *Austin American -Stateman*, Tuesday, August 31, 1993.

25. Renato Rosaldo, *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*. Boston: Beacon Press, 1989, pp. 68-87.

26. William Powers. *War Dance: Plains Indian Musical Performance*. Tuscon: The University of Arizona Press, 1990, pp. 50-60.

27. James H. Howard, “The Pan-Indian Culture of Oklahoma.” *Scientific Monthly*. 18 (5), pp. 215-220.

28. 多いところで 3000 ドル、筆者の調査地で行われる比較的規模の小さいローズバッド・フェアですら一等 1200 ドルの賞金が与えられる。

29. 「与え尽くし」の儀式。主催者は大量の贈答品を用意し、そこに集うすべての人に贈る。喪明け、子の誕生や、卒業、病氣治癒等の機会をとらえて行われる。

30. Frances Densmore, *Chippewa Customs*. Minnesota Historical Society Press, 1979. pp. 51-52.

31. 拙稿「犬でも狼でもなく——ラコタ・スー族におけるエスニック・アイデンティティの創造」【マイノリティは創造する】所収（せりか書房、2001）および「先住民文化再生への視座」【ネイティブ・アメリカンの文学——先住民文化の変容】（ミネルヴァ書房、2002）で一部論じている。